



社会科学研究部報

令和4年 9月 15日

浜松市教育研究会 社会科学研究部

令和4年度 第2回社会科学研究部 研修会

8月3日（火）に、午前は天竜二俣地区の臨地研修を、午後は天竜壬生ホールで実践発表と公演会がありました。

※ふきだし内は、事後アンケートでの参加者の感想です。

1 臨地研修と講話【午前の研修】

〈二俣駅 天竜浜名湖鉄道転車台〉

天竜浜名湖鉄道(株)が運営する、転車台・鉄道歴史館見学ツアーに参加させていただきました。天竜二俣駅は、1940年に建造され、今もなお、SL機関車ターンテーブルを実際に活用して鉄道を稼働させている、稀少な駅である。駅構内は、ほとんどが国鉄二俣線開業当時に建設されたもので、情感あふれる鉄道の原風景が残っていることから、1998年(平成10年)に、国指定の登録有形文化財に登録された。地域の身近な社会的事象として、様々な学年で取り上げることができる題材だと感じた。



単に転車台がすごかった！というのではなく、空間軸や時間軸、社会軸から捉えた天竜浜名湖鉄道を見ることができました。社会事象の見方・考え方に触れる研修でした。

(文責:伊佐見小 藤野 亜弥)

〈光明山古墳 光明寺〉

文化財課から講師を招き、光明山古墳について解説をしていただいた。光明山古墳は、浜松市で最大の古墳であり、現在でも段築の様子が見て取れる。墳形の相似や副葬品の類似など、近畿地方の古墳とのつながりが多く見て取れるようだ。令和2年より国指定史跡となった。教科書や資料集などの縦の歴史だけではなく、地域にある文化財を活用・比較して、横の歴史につなげていきたい。



古墳は近畿地方の文化物で、静岡や浜松にはあまり関係のないだという認識でした。しかし、実際に訪れたことで古墳の存在をより身近に感じることができました。

(文責:気賀小 小川 怜志)

〈二俣城跡〉

芳川北小学校の岡田真吾教諭に、二俣城を解説していただいた。かつて軍事施設として使われた二俣城が、時代と共に地域の象徴として役割が変化していったことや、石垣の並びや配置から当時の姿の読み取り方など、実際に城址を回りながら教えていただいた。また、堀が通路として使われていたことや、その周りにある曲輪(くるわ)の役割等、二股城に残る山城の機能的な特徴も詳しく教えていただいた。現地ではしか味わうことのできない魅力を味わうことができた。



(文責: 初生小 大木 健太郎)

「なぜこの土地に築城したのか」「敵に備えてどのような工夫をしたのか」「石垣や堀などから城主のどんな意図が読み取れるか」「なぜ現在も残されているのか」など、様々な問いを立てることで学びが深まると思いました。地域教材を社会科の授業に生かせるよう私自身も研究していきたいと思ひます。

〈秋野不矩美術館〉

秋野不矩は二俣町生まれの芸術家である。インドの雄大な自然をテーマにした作品を多く作り、高い評価を受けている。こうした作品は、秋野不矩美術館に数多く展示されている。今回の研修で、鈴木館長から「社会科の観点」をもって絵画を見ることについての解説があった。人々の暮らしや文化、気候など社会背景や社会情勢が不矩の作品には細かく描かれており、子供たちと一緒に想像を広げて考えることができる要素が多くある。この臨地研修で、浜松の偉人である秋野不矩の生き方や考え方、絵画の魅力について理解を深めることができた。



(文責: 与進小 大橋 大二郎)

秋野不矩さんの絵は、何度鑑賞しても、素晴らしいと思いました。また、今回、特別展「インドに魅せられた画家秋野不矩と西田俊英展」が始まっていたので、良いときに行けたなど、得した気持ちになりました。楽しませていただきました。ありがとうございました。

2 全体会【午後の研修】

○ 実践発表

「意欲的に社会的事象を追究し、未来を問い続ける児童を育てる社会科学習
— 社会的事象の見方・考え方を働かせる授業づくり —」
葵西小学校 教諭 藤田 直也

葵西小の藤田教諭より、昨年度内野小学校での実践が発表された。小学校4年生の年間を通した実践であり、以下の3つの視点から整理されている。

① 年間の社会科学習を貫く学習問題(ウルトラ学習問題)の設定

「静岡県のくらしやすさは何に関係しているのか」という学習問題を年間通して追究させた。単元の振り返りの中で、ウルトラ学習問題の振り返りを行うことで、単元と単元を関連付けて考えることができるとともに、学びの深まりを見取ることができた。



② 見方・考え方を働かせる資料や発問

児童のもっている素朴なイメージを想起させ、そのイメージギャップから問いをつくることで、追究意欲を高めた。「土地の様子、人の様子に着目して、違いを見付けよう」のように、資料を見る視点を定めたり、方向付けたりすることが、見方・考え方を働かせることに効果的であった。

③ 具体的な事例から概念化への挑戦

2つの事例の比較を通して、考えを深められるようにした。「郷土の発展につくした人々」の学習では、金原明善の治水事業と牧之原開拓に携わった人々の、思いや願い、地域への影響などを比較することで共通点を見付けさせ、知識を概念的なものへと高めることができた。また単元終末では「静岡県がどんな県になっていくとよいか」と問い、学んだことを生かして、未来について考えた。

以上の3点の手立てを通して、意欲的に社会的事象を追究し、未来を問い続ける児童の姿が見られた。藤田教諭の実践から、年間を通して考える視点を明確にした発問をすること、考えを深め概念化につなげるために比較できる資料を作成することなど、目の前の子供に応じて生かしていきたい。

○ 講話

「社会的事象の見方・考え方を働かせる授業づくり」

大阪青山大学 准教授 服部 太

① なぜ、今、「見方・考え方」なのか？

1960年代頃までは、正しい知識が唯一存在し、子供たちに暗記させ、身に付けさせなければならないという「客観主義」の考え方が重要視され「暗記型」の社会科授業になっていた。

一方、現在は、正しい知識について「合意」し、その合意された知識について「共有」をしていく「社会構成主義」という考え方のもと、「何を知っているか」よりも「何ができるか」「いかに問題を解決できるか」が重要になっている。また、情報を一方的に受け取る「情報受信者」ではなく、「情報発信者」にならなければいけない。そのために友達や自分自身、そして教材との対話を大切にし、特に教材との対話をする上で「見方・考え方」を生かしていくことが重要になる。



② 社会的事象の「見方・考え方」とは何か？

「見方・考え方」とは、教材について今まで見えていなかったものを、ある「眼鏡」を掛けることで、違う見え方がするということである。その「眼鏡」とは、位置や空間的な広がりという「空間軸」、時期や時間の経過という「時間軸」、事象や人々の相互関係という「社会軸」である。子供たちにこれらの「眼鏡」を掛けさせながら、社会的事象の差異を提示することで、子供たちは「見方・考え方」を働かせながら教材と対話をするができるだろう。

③ 「見方・考え方」を働かせる問いとは？—主に「思考」を意識—

「見方・考え方」を働かせるためには、教材と問いが重要である。ただ教材について調べるだけでは、深い学びにはならない。思考を深めるためには、教師が、子供たちの問いが湧き出てくるような方向付けをしたり、ある程度の知識を習得させたりすることが重要である。そのために、資料を準備し、効果的に提示する必要がある。また、「見方・考え方」を働かせる時は、その事象の社会背景に迫ることが大切である。

④ 見方・考え方を働かせる問いとは？—主に「選択・判断」を意識—

学習指導要領では、社会的事象について、「多角的に考える力」と、「選択・判断する力」を養うとされている。子供たちに選択・判断させる時には、社会構造や社会背景を踏まえてさせなければならない。子供たちの願いや思いだけで考えさせるのではなく、教師が資料提示や問いによる条件制御をすることで、合理的な判断をさせていくことができるだろう。

実際に服部先生が行われた実践を踏まえながら、お話していただいた。教師の深い教材研究や資料の準備、質の高い問いが重要だということを感じた。子供たちが「見方・考え方」を働かせながら、主体的・対話的で深い学びができるよう、これからの社会科の授業づくりに生かしていきたい。

(全体会文責:井伊谷小 山田 航生 東小 柘植 亮佑)